

研究テーマ 回復期リハビリテーション病棟における介入単位数の影響

病 院 名 医療法人社団健育会 石川島記念病院

演 者 ^{もりかわ けんじ}
○森川健史(理学療法士) 河田桂志(理学療法士)

概 要

【研究背景】

回復期リハビリテーション病棟(以下、回復期リハ)における効果と実施量の関係は、脳卒中患者を対象とした先行研究により実施量が多い方がADLの改善や在宅復帰率が高くなったと報告している(池永ら、2008)。一方で、大腿骨頸部骨折患者を対象とした運動器疾患については、平均訓練単位数が増えるほど運動FIM利得が有意に大きかったとする報告(徳永ら、2015)や、実施単位数と到達FIMには関連がなかったとする報告(Maeshima et al., 2012)などがあり、意見の一致を認めていない(近藤、2021)。

【研究目的】

当院回復期リハにおける介入単位数による効果について調査することとした。

【研究方法】

研究に先立ち、石川島記念病院倫理委員会の承認を得て、ヘルシンキ宣言に基づき患者のプライバシー等に十分配慮をして実施した。対象者は、2020年1月から2023年12月までに当院回復期リハを退院した患者のうち、除外基準を適応した527症例を対象とした。対象者の診療記録より疾患別リハビリテーション、在院日数、FIM利得、FIM効率、入院1日当たりの単位数、実績指数、転帰先を後方視的に取得し評価項目とした。統計解析は、脳血管・運動器・廃用症候群に分け1日単位数と各項目間で相関分析を行い、転帰先への影響は自宅退院群と施設退院群の二群間で1日単位数の群間比較を行った。統計処理についてはEZR ver1.64を用いてすべての検定における有意水準は5%とした。

【結果】

脳血管では、退院時FIM、退院時M-FIM、FIM利得、M-FIM利得で正の相関を認めた。運動器では、各項目とも相関は認めなかった。廃用症候群では、退院時FIM、退院時M-FIM、FIM効率、実績指数で正の相関を認めた。各疾患別で転帰先の二群間で有意な差は認めなかった。

【考察】

脳血管については先行研究を支持する結果となり、介入単位数の増加が身体活動量等の増加につながったと考えられる。運動器では今回の評価項目と1日単位数との関係は認められなかった。骨折を主とした運動器疾患では回復にまつわる様々な報告がされており、運動器疾患特有の多様性が示唆された。

【結論】

当院回復期リハにおける介入単位数による効果について調査を行った。脳血管・廃用症候群では介入量が多いほどFIMの改善に有効な結果が得られた。運動器については明らかな効果を認めなかった。介入量の多寡は在院日数の短縮や在宅復帰率には影響を与えなかった。

【引用参考文献】

池永康規、高橋友哉、後藤伸介:回復期リハビリテーション病棟における訓練時間増加の効果. Jpn J Rehabil Med. 2008; 45: 744-749.
近藤国嗣:回復期リハビリテーション医療 — これまでの20年、これからの20年—. Jpn J Rehabil Med. 2021; 58: 468-481.